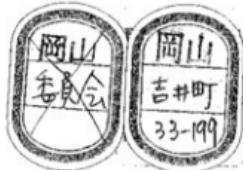


岡山県赤磐郡吉井町 平山遺跡発掘調査報告書

1981年3月

平山遺跡調査委員会



序

吉井町は古代吉備文化の影響を受けた東部地方に位置し、埋蔵文化財が多い反面、保護保存は充分とは言えず、今後の諸調査に期待されるところが大きいものがあります。

この度平山遺跡発掘調査は、町道丸山線改良事業に伴う調査でありました。改修赤磐郡誌では飯山城（吉井町石）惣分城（赤坂町惣分）両城址の防禦設備が当地内に存在したと記されていましたが、今回の調査区域内からは、その形跡が確認できませんでした。

この報告書については、平山遺跡調査と、旧来より保存していた出土遺物について、調査結果を公表するもので、これを契機として文化財への関心と啓蒙、歴史研究資料等に役立てば幸いと存じます。

最後になりましたが、本調査に当り、岡山県教育委員会、建設事業関係者、地元関係者からのご支援、ご協力を得ましたことをあわせて厚くお礼申し上げます。

昭和 56 年 3 月

平山遺跡調査委員会

会長 近藤 肇

例　　言

1. 当報告書は、町道丸山線改良事業に伴う、赤磐郡吉井町平山に所在する平山遺跡の報告書である。
2. 発掘調査は、昭和55年12月15日から同年12月26日まで実施した。現地調査は、文化課下澤公明が担当した。
3. 挿図中の高度値はすべて海拔高である。
4. 挿図中の方位は、磁北である。
5. 遺物実測図は、4分の1である。
6. 吉井町内出土遺物については、吉井町立吉井中学校の協力を得た。
7. 報告書の作成・編集・執筆は、下沢が当り、遺物写真は、文化課井上弘によった。
8. 発掘調査においては、下記の方々の協力を得た。

戸川義和・戸川定雄・戸川実・戸川正弘・戸川秀昭・尾野頼雄・尾野均

9. 平山遺跡調査委員会の組織は下記の通りである。

委員長	近藤 肇	吉井町教育委員会教育長
副委員長	吉光 一修	岡山県教育委員会文化課課長補佐
委員	井上賀弥太	吉井町文化財専門委員
"	下澤 公明	岡山県教育委員会文化課文化財保護主査
"	西山 政頼	吉井町役場建設課課長
"	鈴鹿 真一	吉井町役場建設課技師
"	藤本 久志	吉井町教育委員会社会教育係長
監査	是松 肅	吉井町教育委員会事務局課長
"	河本 清	岡山県教育委員会文化課文化財二係長

目 次

序

例言

I 遺跡の地理・歴史的環境	1
II 調査に至る経過	1
III 調査の概要	2
・石垣状遺構	2
・近世墓	3
IV まとめ	3
V 吉井町内出土遺物について	4

図 目 次

第1図 平山遺跡位置図 (S = 1/50000)	1
第2図 地形図 (S = 1/500)	2
第3図 近世墓	3
第4図 吉井町内出土遺物	6
第5図 "	7

図 版 目 次

図版 1 1 遺跡遠景	8
2 調査区全景	8
図版 2 1 石垣状遺構	9
2 近世墓	9
図版 3 吉井町内出土遺物	10
図版 4 "	11

I 遺跡の地理・歴史的環境

平山遺跡は、岡山県赤磐郡吉井町平山に所在する。吉井町は、赤磐郡の最北部に位置し、吉井川の右岸に位置する。遺跡は、標高200mから400mの吉備高原上にあたり、小溜池灌漑による棚田がひらかれている一角に位置する。遺跡は、東側に張り出す丘陵の中ほどに位置し、水田との比高差は10mから70mを測る。当丘陵は、北から東にかけては、農道と水田の造成のために、さらに南側についても過去の家屋造成のために大きく変形を受けているのが現状である。

平山遺跡周辺においては、後述するが6世紀後半から末と考えられる須恵器が出土している入小田窯址が存在する。また室町時代と推定される石塔が確認されている程度であり、遺跡の分布の希薄な地といってよいであろう。

II 調査に至る経過

昭和15年2月に吉井町教育委員会から、町道建設用地内に古墳と推定される石の露出があるとの連絡を受ける。文化課の光吉主幹(当時)・松本が現地におもむき、現地立会をおこなう。

立会の結果、一応発掘調査の必要が認められたので、町当局に対し道路工事施行予定および用地買収等の問題について協議をおこなう。遺跡の保存処理についても考慮を求めるが、地形的制約から明



第1圖 平山遺跡位置圖

難な状況であった。このようなことから、発掘調査を実施するやむなきにいたったのである。

同10月に至り、町教育委員会から遺跡部分を残し、工事の着工をしたいむねの連絡を受ける。11月末に松本が再度現地会をおこない、遺跡範囲の確認をし、工事の着工を了解する。

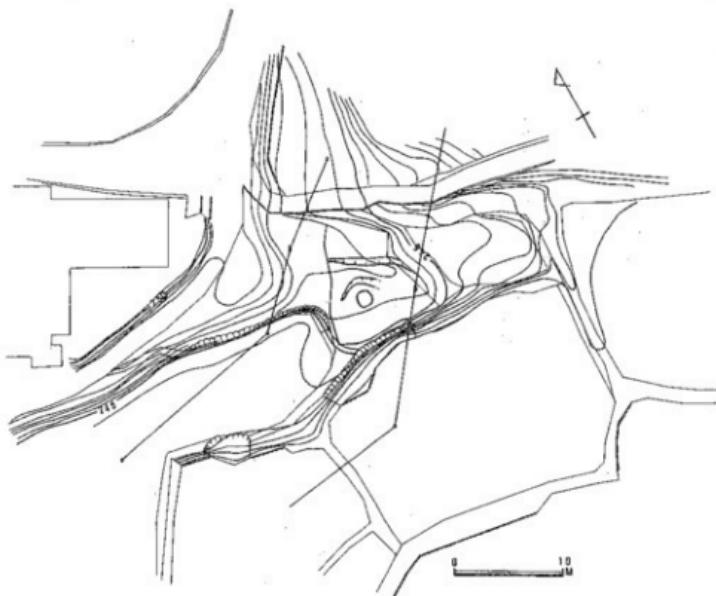
発掘調査は、平山遺跡発掘調査委員会を組織し、12月15日から12月26日に亘り実施したのである。

III 調査の概要

調査は、丘陵上の石の露出部分と南側崖面にはり付くように存在する石垣状の石組についておこなった。しかし、調査前においてこの丘陵上に、“戸川氏祖先”と記された石碑が立っており移築をしたとのことである。さらに、移築に際しては、石碑の下部を掘り下げをおこない、内部からキセルと礫前焼の小壺を掘出した。これらの出土遺物は、庚申さまの鳥居の脇に埋葬したということであった。このようなことから、この移築あとについても調査対象とした。

・石垣状遺構

南崖面に存在する石垣上の石組は、崖面に貼り付くように二段から三段に亘って組まれている。下段の石は、かなり大きめの石を、上段は比較的小さい石を用いている。石の隙間には、小礫をかましている。裏込めについての考慮はされておらなかったとみえて直接崖面にそわせている状況が観察さ



第2図 地形図

れた。

なお、この石垣は、写真撮影のための清掃の過程で一部が崩壊し、図化することができなかった。

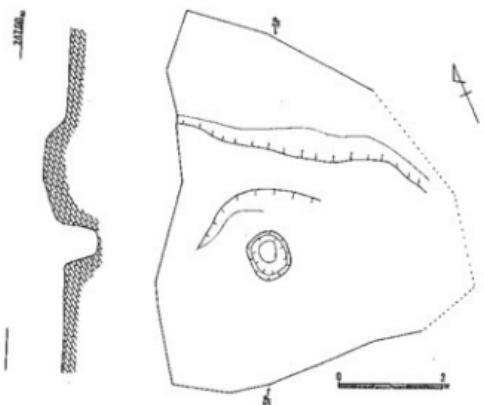
・近世墓

すでに移築時に内部が掘られ、出土した遺物等は、先に記した如く一括して再埋葬された。したがって、土壇内を清掃するだけであった。土壇は、西から北にかけて一段平坦部を作り、その中央に $1m33cm \times 1m13cm$ 、深さ $91cm$ ほどの円形の土壇である。周囲に礫を埋め込んだと見えて、改葬時の掘り下げにおいて残された礫の一部が認められた。

IV まとめ

今回の発掘調査においては、石垣状の石組と近世墓が確認された。前者については、過去に家屋が建っており、その時の礫石が下段の畝に残されていることなどから、これに伴う擁壁のための石組と判断されるのである。

近世墓については、墓の上に後になって “戸川氏祖先” の石碑を建立したとのことであり、この石碑と墓とは全く関係がないようである。しかしながら、近世墓として確認されたのは、これ一基であり過去の伝聞による何らかの関係が存在した可能性もなしとはいえないであろう。



第3図 近世墓

V 吉井町内出土遺物について

今回、ここで取り上げる遺物は、吉井町内出土遺物であり、吉井中学校および吉井町役場において保管されているものである。

1～4は、是里出土のものである。壺形土器と、台部の破片である。壺形土器は、口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線を施す。内外面の調整は、いずれも剝離のため不詳である。色調は、外面が褐色をして内面は褐色を示す。焼成は、比較的良好である。

4の土器は、台付鉢あるいは直口壺の台部となると推定されるものである。台部との接合ははり付けでおこない、端部は若干比厚させている。台部には、8ヶ所の三角状の透しを用いるが裏面には貫通しない。胎土、焼成色調とも上記した壺形土器と同じである。

5・7～10は、山陽ブラシ工場の南側から出土したものである。遺跡の出地は、吉井川の支流である淹山川によって形成された自然堤防上に位置すると考えられる。

5と7は壺形土器の口縁部破片である。口縁端部を上下に拡張し、端面に沈線を施す。5は、頸部に凹線が認められ、7は、口縁部内面に円形浮文も認められる。8は、口縁端部を拡張しないものであり、端面および頸部に凹線の施文がみられる。器面の剥離が著しく、調整等の観察は不詳である。焼成は、ややモロク、色調は褐色を示す。いずれも同内様を示す。

6は、長田より出土したもので、今回調査した平山遺跡の近くである。比較的長い頸部を有する壺形土器であり、端面に凹線を施文する。頸部下半には、凸帯文の施文が認められる。胎土は、1mmから2mmの砂粒を含み、色調は、褐色を示し、焼成は良好である。なお、器面の荒れが著しい。

11は、妙徳寺の烟より出土した完全品の壺形土器である。器高29.4cm・口径14.5cm・底部径7cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反した端部を外方に比厚させながらつくる。端面は、横ナデによる凹部がみられる。頸部下半から底部にかけて細いハケ状工具による整形がおこなわれる。頸部内面は頸部下からヘラ削りが認められる。底部は、上げ底ぎみである。胎土は、1mmほどの砂粒を含み、焼成は良好である。色調は、茶褐色を示す。

12は、仁堀東字寺岡から出土した、口縁部を欠く壺形土器である。頸部下半に円形の刺突が二段に亘ってめぐっている。器面の荒れが著しく調整度の凹化はできず、しかし頸部上半において傷痕が下半において笠痕が認められる。

胎土は、1mm～2mmの砂粒を含み、焼成はややモロイ。色調は、褐色を示す。

(図5・1～13)は、3の須恵器の外面に“昭和11年2月18日、小学校内古墳ヨリ消防組ノ手に依之発掘ス”と書かれた紙がおさめられていた。現在は消滅しており、布都美古墳がこれに該当すると考えられる。以下当古墳出土遺物について略記する。

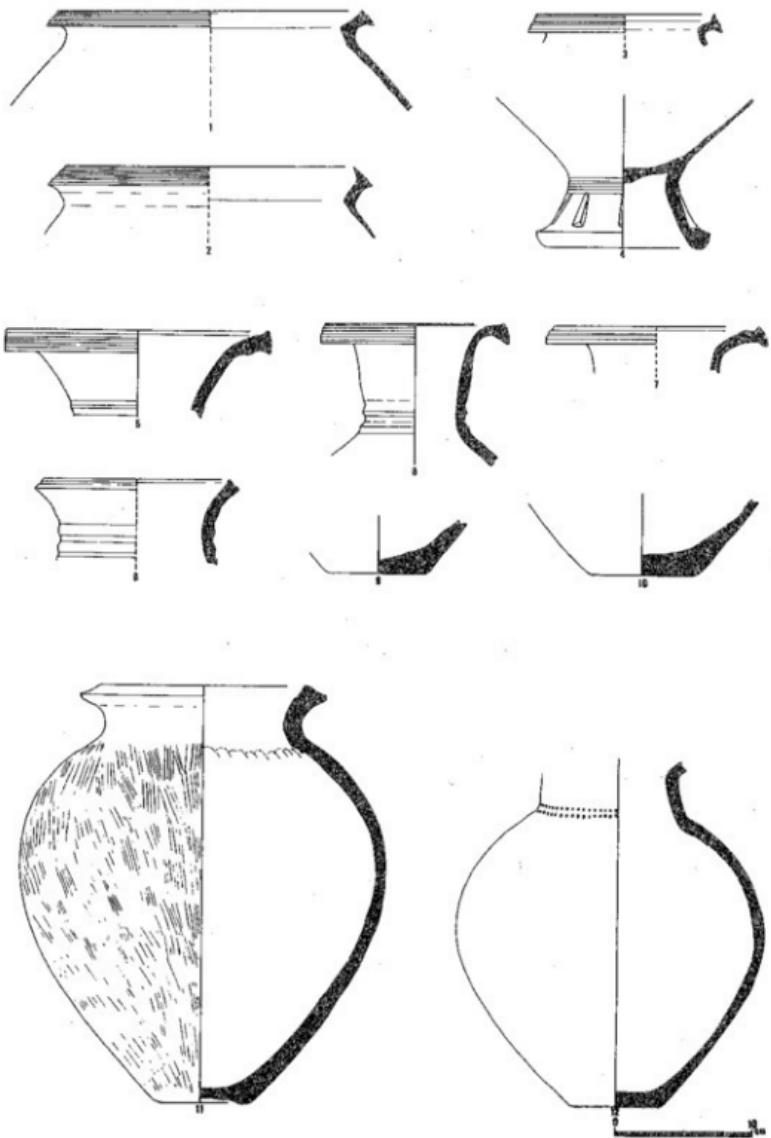
1は、口径13.9cm、器高5.1cmを測る壺蓋である。胎土は、3mmほどの石粒を含む。焼成は、堅緻。色調は、茶褐色を示す。2は、口径4.9cm、器高12.5cmを測る壺身である。底部は、平底風の稜線を有する。胎土は、砂を含み、焼成は良好である。色調は、灰色を示す。3は、口径13.3cm、器高4.7cmを測る壺身である。底部は、2と同様に平底風の稜線を有する。胎土は、5mm大の石粒を含み、燒

成は良好である。色調は灰色を示す。4は、口径12.4cm、器高4.4cmを測る坏身である。座部外面には、ヘラ削りが認められる。胎土は、微砂を含み、焼成はややモロイ。色調は灰色を示す。5は、口径12.7cm、器高4.6cmを測る坏身である。底部は、平底風の稜線を有する。胎土は、2mm～5mm大の石粒を含み、焼成は堅緻である。色調は、灰色を示す。6は、口径10.5cm、器高3.5cmを測る坏蓋である。天井部近くにヘラ削りをおこなう。胎土は、1mm大の砂粒を含み、焼成は堅緻である。色調は、淡灰色を示す。7は、口径9.7cm、器高3cmを測る坏身である。底部は、平底風となる。胎土は、細砂を含み、焼成は良好である。色調は、淡灰色を示す。8は、口径9cm、器高3.1cmを測る坏身である。胎土は、細砂を含み、焼成は良好である。色調は、淡灰色を示す。9は、口径11.9cm、器高17.3cmを測る壺形土器である。口縁部にはカキ目を有し、胴部下半から座部にかけてヘラ削りをおこなう。胎土は、小石粒を含み、焼成は堅緻である。色調は、灰色を示す。10は、口径10cm、器高14.9cmを測る壺形土器である。器面の磨滅が著しい。胎土は、細砂と1mm～2mmの砂粒を含み、焼成は、モロイ。色調は、乳灰色を示す。11は、口径8.6cm、器高8.3cmを測る壺形土器である。胴部下半は、ヘラ削りをおこなう。底部に沈線を施す。胎土は、1mm～2mmの砂粒を含み、焼成は良好である。色調は淡灰色を示す。12は、口径8.3cm、器高8.3cmを測る壺形土器である。胴部中位下半にかけてヘラ削りをおこなう。頭部下端に沈線を施す。胎土は、2mm大の砂粒を含み、焼成は良好である。色調は灰色を示す。13は、口径8.7cm、器高9.4cmを測る壺形土器である。ゆるやかに外反する頭部を下方に拡張する。その端面には、沈線を施す。肩部上半に凸帯状のものを付す。胴部中位から下半はヘラ削りをおこなう。胎土は、2mm大の石粒を含み、焼成は堅緻である。色調は、暗灰色である。14は、残存高21.7cmを測る提瓶である。肩部には、把手が付される。

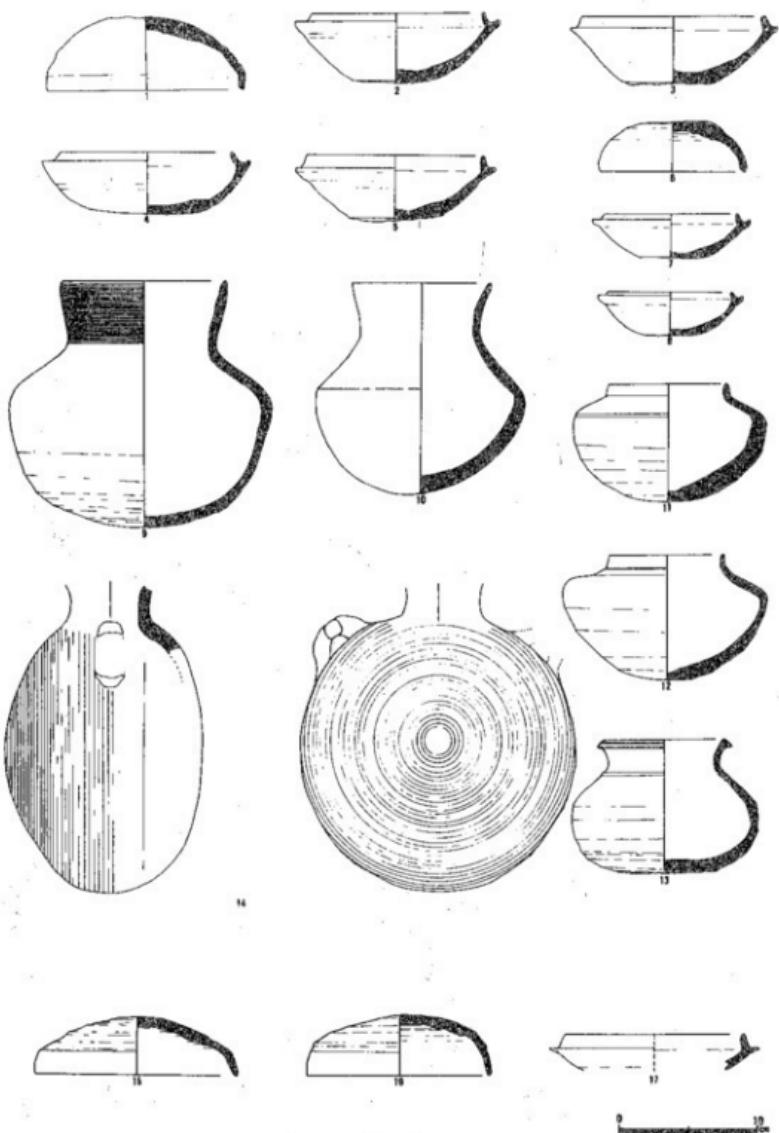
以上が布都美古墳出土の須恵器である。15と16は、妙徳寺の烟より出土したものである。15は、口径14.7cm、器高4.1cmを測る坏蓋である。口縁部は内湾気味となり、天井部にかけて、ヘラ削りをおこなう。胎土は、1mm～2mmの石粒を含み、焼成は良好である。色調は茶灰色を示す。16は、口径13.3cm、器高4.3cmを測る坏蓋である。口縁部は内湾気味となり、天井部にかけてヘラ削りをおこなう。胎土は、1mm～2mmの砂粒を含み、焼成は堅緻である。色調は、灰色を示す。

17は、ゴルフ場造成の際に破壊された入小田古窯址から採集されたものである。推定口径13cmを測る坏身である。底部にかけてヘラ削りがみとめられる。焼成は、堅緻であり、色調は、灰色を示す。

以上が、吉井町内出土の遺物である。布都美古墳出土遺物については、ほぼ同一の時期を示すと考えられるが、6～8の遺物については、他のものより口径、器高とも一回り小さくなっている。したがって一括として取り扱うかについては、問題がある。しかし、7にみられる底部における平底風のものは、大形品にもみられるのであり、時期的な差を有さないことも考えられよう。また、山陽プラスチ工場南側出土の出器は、中期後半の時期のものである。その出土地点は、山間部においてはめずらしく自然堤防上に存在することなど大へん興味ある内容を含んでいることをいえるのである。



第4図 吉井町内出土遺物



第5図 吉井町内出土遺物

図版 1

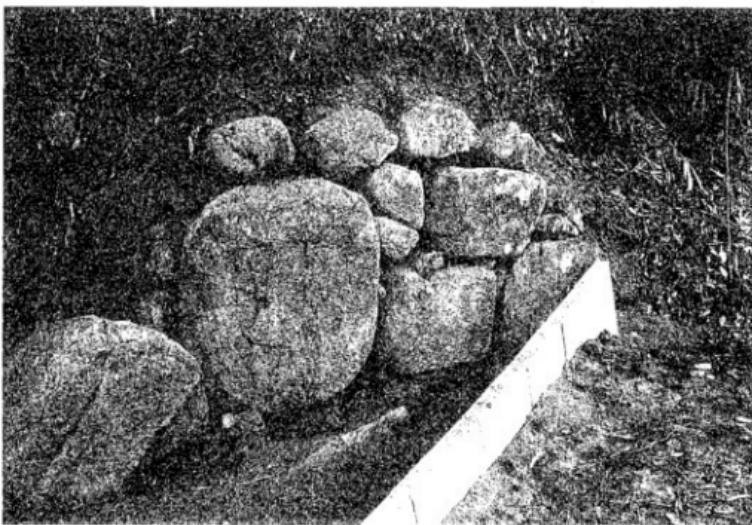


1. 遺 跡 遠 景

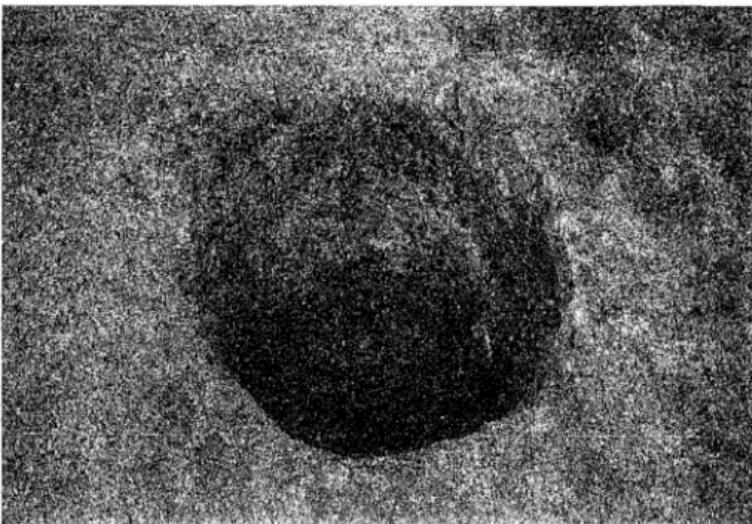


2. 調 査 区 全 景

図版 2

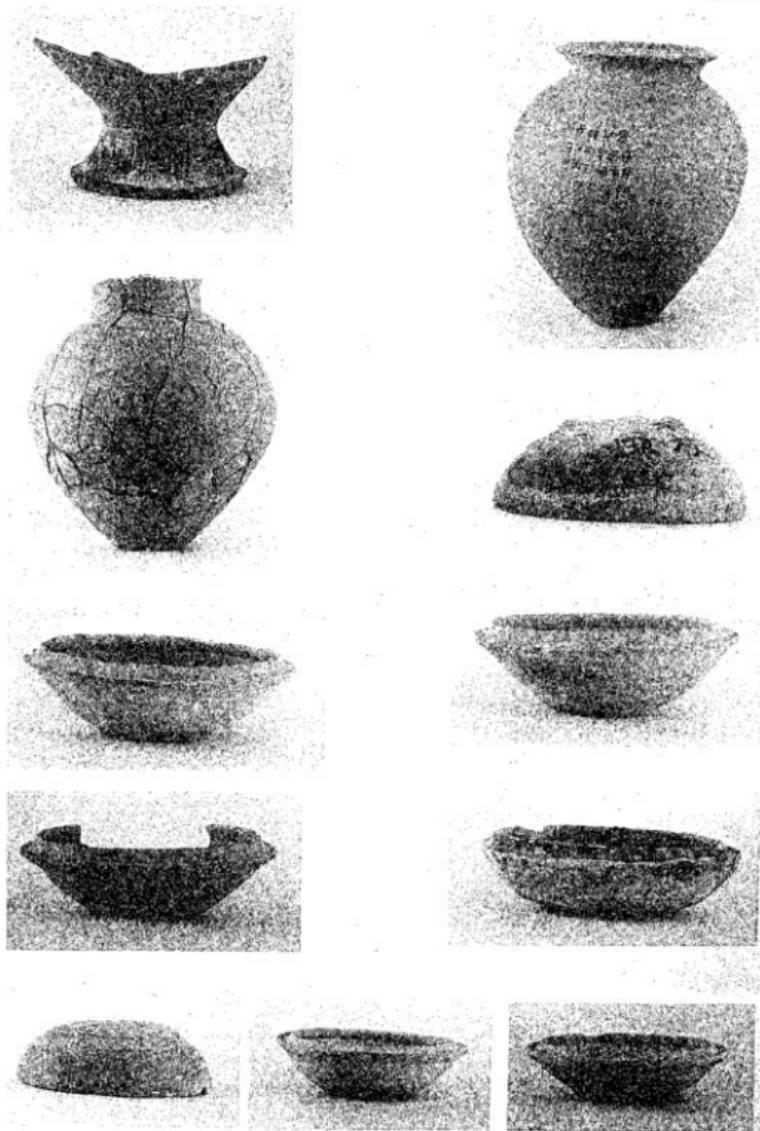


1. 石垣状遺構



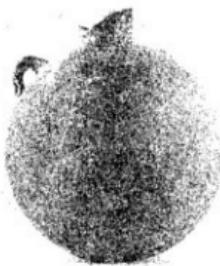
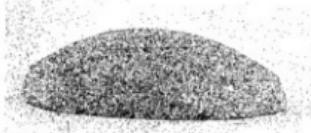
2. 近世墓

圖版 3



吉井町内出土遺物

圖版 4



吉井町内出土遺物

岡山県赤磐郡吉井町
平山遺跡発掘調査報告書

昭和 56 年 3 月 26 日印刷
昭和 56 年 3 月 31 日発行

編 集 岡山県教育委員会
発 行 平山遺跡調査委員会